



映像か?テキストか?

著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学視聴覚教育
巻	30
ページ	66-68
発行年	2007-03-31
その他のタイトル	Visual Media? or Literature?
URL	http://hdl.handle.net/10112/12047

映像か？テキストか？

二階堂善弘

ガクセイの反応

「学生が本を読まなくなった」

とは、毎度毎度あちらこちらのセンセイ方から伺うお話である。確かに、かつて学生、特に文学部のガクセイというのは、本を読むのが商売であったはずである。しかし、いま接しているガクセイ諸君に聞くところによれば、いまや彼らにとって読書というのはまるで「苦行」か「罰」のように感じるものらしい。特にぶ厚い学術書などは、見るのもイヤな存在であるとのことだ。

一方でこれらのガクセイの映像メディアへの食いつきは悪くない。映画やドラマやアニメ作品を見せると、或いはこちらの反応よりも素早いのではないかと思うほどである。恐らく、多くの情報を映像・音声を使った視聴覚メディアから得ることにすっかり習熟しているものと思われる。

ところで自分などは、ふだん研究の場においては、古典であれ現代のものであれ、テキスト資料にどっぷり浸かっている。さらに電車に乗っていれば必ず新聞か書籍を読んでいるし、家に居ればテレビは見ているものの、同時にインターネットで情報を検索していることが多い。まあ起きている時間は、活字に接してない時間というものがないと言ってよいくらいの立派な「活字中毒者」だ。

この手の人間にとって、書物を読まない人間というのはおかしな生き物に見えるらしい。多くのセンセイ方も、たぶん似たような人種なのであろう。しかしどうも昨今、やはりへ

んなのは我々の方ではないかと思直している次第なのである。

文字文化はいつも少数派？

かつて地球の人口はもっと少なかったはずだが、その中でも「文字を読める人間」というのはさらにいつも少なかった。

自分が専門にしている中国などでは、漢字を使っているせいか余計にひどく、かなり後の時代になっても、読書人と呼ばれる文人階層や僧侶・道士などの宗教職能者、あとは一部の富裕層か商売人が文字を読めるだけで、ほとんどの一般民衆は文字が読めなかった。ではその一般民衆に文化的なものが理解されないかということ、そんなことはなく、芝居や講談などの芸能を通じて、或いは庙会などの宗教行事を通じて体得されていたのである。だから『三国志』の故事なども、みなつぶさに知っていた。

つまり文字文化を扱う人間というのは、常に少数派であったし、書物というものも貴重なものであった。それが常態であったと言ってよい。

近代になり、学校制度が発達し、書物の出版もそれまでとは比較にならないほど増えた。大学などの高等教育もはるかに普及した。一方で芝居や講談が変わって、映画やレコードなどのメディアによる伝達が発展した。さらにその後はテレビ文化が台頭するようになった。識字人口は確かに比較にならないほど増えた。先進国においては、大部分の

国民が文字を読めるようになった。それ自体は素晴らしいことではある。

ただ、だからといって、すべての人々がある一定の教養を備えていなければならないということではないのではないか。すべての学校に行く人間が、難しい本の内容を知っていなければいけないというわけではないのではないか。どうも教育制度が普及することイコール、教養のある人間が増えるものと、世間の側が勝手に誤解してしまった感がある。

結局、一時的にテキスト重視の傾向が強くなり過ぎていただけではないだろうか。テキストが一番情報を得るのに適していた時期は確かにあった。そのために書籍や新聞も増えた。しかし、その「肥大化」はやがて他メディアが発達してきたら、最後には縮小する運命にあったのではないか。

今後出版物は増えるだろうし、またインターネットのWebサイトにおける「新しいテキスト」も広く読まれるようになっていくであろう。ただ、難しい内容のモノを読む人間の数はそれほど増えてはいかないのではないか。恐らく、教養を身につけたいと思うような人間の割合というのは、これからも依然として少数派を占めるに過ぎないのだろう。

なんのことはない、ちょっと前の状態に戻っただけのことだ。

材料の多様化と教育

いまやメディアの側も多様化している。

かつて文字でなければ得にくかった情報や知識も、音声或いは映像を使った視聴覚メディアで容易に入手できるようになっている。例えば現在、世界の出来事をニュースで見ようとしたら、一般の人間はまずテレビかラジオを視聴し、そして次にインターネットを見るであろう。新聞などは速報性からいっても最後の方の順位であり、そのために新聞を読

まない層も日々拡大しているわけである。いまやニュースを知るのに、新聞は必ずしも必要ではないといってよい。

また教養方面にしても、現在は数多くの優れた映像教材があり、外国語や異文化はもとより、政治や経済の問題、科学の知識など、これらを通じて幅広く学習することが可能になっている。いや、映像資料の方が勝る場合も多々ある。例えば「道教の道士」というモノをテキスト資料で理解させようとするの大変である。日本には道士はいないし、道教も理解しにくい。似たような宗教職能者で示しても誤解を招くだけである。しかし道士が出てくる映像資料を見せるならば、少なくとも外面は一発で理解することができる。キョンシー映画を使ってみせてもよいだろう。百の説明を重ねるより、一つの映像を見せてしまった方が早いということは、何度も経験している。

むろんテキストの優位性はある。物語を描くに当たって、深く人間心理を洞察したり、感情の機微を描くことなどは、テキストでなければ不可能な面もある。また、映像資料はイメージによって誤解が印象づけられてしまう面もある。例えばキョンシー映画の例であるが、実在の道士などはキョンシーを操ったりすることはまずない。つまりキョンシー映画はしょせん娯楽映画であり、おもしろおかしく話を作っているわけで、現実の宗教に対する考慮は全くといってよいほどなされていない。さらに時代考証も皆無に近い。これをもとに道教や道士を考えられてしまうと、本当は困るのだ。

ただ、それにしても現在はあまりにもテキスト系の教材に偏りすぎているといえよう。要はバランスが悪いのである。映像や音声の反応に慣れ親しんでいる学生が多くなるならば、これからの教育にはこういった視聴覚的

二階堂善弘

な教材を積極的に取り入れていくのは、むしろ当然であろう。

教員の側も、むしろ教育の現場で積極的に「メディアミックス」を行っていくべきだと

思うのだ。むしろ、最後のところはいつもテキストで締めてもよい。いくらでも展開の方法はある。